



ほつとするね
緑の府中

指導室だより

第 54 号

編集・発行 府中市教育委員会学校教育指導室
〒183-8703 府中市宮西町 2-24
電話 042-335-4063

―第42回特別支援学級連合学芸会―

練習の成果を

思う存分に発揮する

第42回府中市立小中学校特別支援学級連合学芸会が、平成19年11月30日に府中の森芸術劇場ふるさとホールにて大勢の来賓、保護者、地域の方々の出席のもと開催された。

始めに野口忠直市長より「今日は練習の成果を十分に発揮して素晴らしい連合学芸会になりますよう頑張ってください」という励ましの言葉をいただいた。

次に特別支援学級設置校を代表して府中第九小学校加藤康紀校長より「今日まで一生懸命に練習してきたと思います。みんなで仲良く元気よく頑張ってきたので、来賓の方、保護者の方、地域の皆様方、本日はありがとうございます。特別支援教育が今年度から始まりました。心身障害学級から特別支援学級に変わりました。何が変わったかという点、壁育から特別支援教育になり、壁

がなくなくなりつつあります。こういう機会に子どもたちの元気な



府中第一中学校 劇「ハニーポットと白いネコ」

姿を見て支援してください。これから特別支援教育は盛んになっていくと思います」という挨拶があった。

いよいよ演技の開始。まず、南町小学校「のはらうた」。続いて、府中第九小学校、デイズニーメドレー「ハイホー！白雪姫よりく・ミッキーマウスマーチ・ひと足お先にアラジンよ

りく」。午前の部前半の最後は、府中第四小学校、合奏「イエスタデイワンスモア・おおジャンゼリゼ」歌「ともだちはいいもんだ」。

休憩後、新海功教育長より「今日は、歌あり、合奏ありと発表した学校の演技は大変素晴らしいと感動しました。各校の先生方には、子どもたちのために日頃大変ご尽力をいただいていますことに感謝したいと思えます」とのお祝いの言葉があった。午前の部後半は、府中第五小学校、合奏「星にねがいを」歌「ピリプ」合奏「アメイジン グ グレイス」。小柳小学校は、合奏「上を向いて歩こう」「見上げてごらん夜の星を」。府中第二小学校は、合唱「君をのせて」合奏「ミッキーとなかよし」と太鼓「まつりだっこ」。

小学生の部は、練習の成果を發揮し、素晴らしい演技だった。午後の部は、いよいよ中学生の発表。最初は、府中第四中学校の合奏「宇宙戦艦ヤマト」群独「あめ」ハンドベル「さくら」。続いて府中第一中学校の劇「ハニーポットと白いネコ」。最後は府中第二中学校の合唱「夏の日」の贈りもの「夜汽車」合奏「アフリカン・シンフォニー」。

中学生の発表は、迫力があり、大変見応えのある演技だった。



教育委員
北島章雄氏

教育委員就任にあたって

昨年10月1日教育委員に就任しました北島章雄と申します。私の学校教育とのかかわりは、子どもたちが府中第三小学校・府中第三中学校でお世話になっている時、PTA会長として活動していたことから始まりました。子どもの教育は、学校教育とともに地域で育てていく力が必要であると思います。私は、地元青年会、消防団とのかかわりから実践を通して地域のしきり、人とのかわり、その中で自分の役割などを多く学んできました。

今は、世界中の情報がテレビやインターネット等で簡単に知ることができるとは、しかし、実際自宅の隣人や町内の方々の情報については、自ら進んで出向いていかないと分からない事が多い世の中ではないでしょうか。私自身が地域社会を通して学んできたことを諸先輩の方々、教職員の皆様のご指導を受けながら、教育委員会の中で再び子どもたちのために生かしていかれたらと思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。



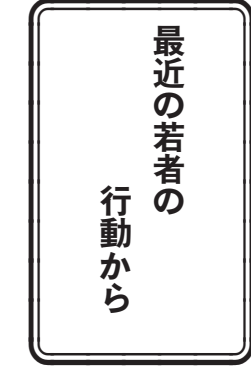
〈教育随想〉

諦めずにできることから

府中市教育委員会学校教育部

副参事兼指導室長 酒井 泰

最近の若者の行動から

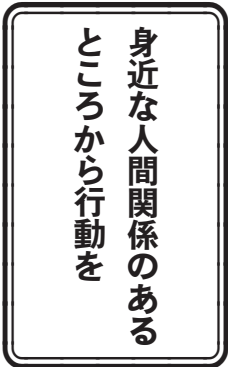


行きつけのファーストフード店の階段。すれ違うのも少々きついその階段で、階下からトレーを持って昇って来る人を階上で待っていると、すれ違いざまに「ありがとうございます」と声をかけてくれるのは、年配の人。若者は、気付かないのか、声をかける必要もないと思っ

ているのか、当然の様子。つい、「昔はこうではなかった」という言葉が私の頭に浮かんだ。

だ。呼びかければ格段にマナーがよくなる。好ましいことではあるが、「なぜ、このような注意までしなければならぬ世の中になったのだろう」と嘆く声も聞かれる。これらに象徴される最近の若者の行動については、実に憂慮すべきことの一つとして話題になることも多い。また、こうした若者の行動の原因について、学校教育の問題がある、いや家庭教育の問題などと、その原因と責任についても様々な意見が出される状況となっている。

身近な人間関係のあるところから行動を



「昔はこうではなかった」「どうしてこのような世の中になっってしまったのだろう」と思うような課題について、積極的に原因を究明し、解決に向けた方策を検討することは何よりも大切なことである。しかし、この手の課題は大き

すぎで、簡単に解決策を見出すことはできない場合が多いのではないだろうか。また、自分ひとりではとても解決できる類のものではないという結論に行き着きやすいものもある。そして、自らの非力さに無念を感じつつ、「全く近頃の若者は……」と嘆いているだけになってしま

うのではないだろうか。ない、「今どきの子どもたちは」などと諦めるのは、簡単なことであるが、一番してはいけないことではないだろうか。今も昔も、子どもは教わらないことはできないのだということとは同じなのではないか。今の子どもも教わればできることがたくさんあるはず。教えずにできないことをただ嘆いているのは、子どもにとっても大人にとっても不幸なことではないだろうか。もちろん、直接的に見ず知らずの子どもにも注意するのは勇気がいること。身近な人間関係があるところから行動を始めることが大切であると思う。

随分前のことになるが、歩道の狭いところで自転車に乗った中学生ぐらいの男の子とすれ違うことになった私は、かなり手前の時点で道をあげ、中学生を待ってあげた。私は、すれ違う時に中学生が「すみません」と声をかけるか、軽く会釈ぐらいはすると勝手に思い込んでいた。私の予想はずれ、中学生は何事もないように私の横を通り過ぎようとした。思わず私は「あれっ、待ってあげたのに」と声をあげてしまった。中学生はその私の声に気付いたのか、5メートルぐらい行き過ぎたところ

「思いは必ず叶う」



るので自転車を止め、こちらを振り返った。言葉は何もなかったけれど、その中学生は私に向かって、会釈をした。

この対応が正しいのか、間違っているのか、私には判断はできない。きっと、もっと的確な対応というものがあるのだろう。しかし、まずは行動することだと思っている。そうすれば結果は必ずついてくると信じて行動することが大切である。



府中市教育委員会研究協力校研究発表報告

「互いにかかわり合い、自ら楽しむ体育学習」

府中市立小柳小学校
研究主任 寺本 英雄

【研究主題設定】

全校児童に「体育に関するアンケート（口答質問も含む）」を実施し、この集計結果と「教師から見た児童の実態」とを比較し、体育を楽しいと回答した児童と楽しくないと回答した児童とのクロス集計結果や質問項目内において顕著な違いがある回答等に視点を当て、各分科会ごとに目指す児童像を設定し、それらの目指す児童像から、研究主題を設定した。

【研究の進め方】

① 「運動の特性（機能的特性、構造的特性、効果的特性）」と児童の実態を踏まえて、「目指す児童像」を設定し、その「目指す児童像」から研究主題を設定する。
② 年度当初に研究プロットを全体で確認し、共通理解をした上で、研究をスタートさせる。ま

た、流れの確認も含め、まず、研究推進委員会提案授業を行う。

③ 「目指す児童像」から、より具体的な「よさのあらわれ（B規準とする具体的な児童の姿）」を設定する。

④ 「よさのあらわれ」に迫るために「授業の流れをつくる指導」と「よさを引き出す支援」を設定する。

※ 「授業の流れをつくる指導」により「よさのあらわれ」を見取ることが難しい児童に対して、「よさを引き出す支援」を行う。この流れを指導と評価の一体化ととらえる。

⑤ 「授業の流れをつくる指導」と「よさを引き出す支援」を学習過程や本時の学習にしっかりと関連させる。

⑥ 実証授業において「児童の楽しむ姿」と「指導・支援の工夫」を視点に、授業考察を行い、学習前後の児童の実態の変容を捉



え、成果と課題を考察する。

⑦ 3年間にわたり、東京学芸大学教授立木正先生、後半2年間、同大学准教授松田恵示先生に継続的な指導をいただき、研究を進めた。

【研究の実践】

低・中・高・仲よしの4つの分科会に分かれて研究を進めた。各学年ごとに事前授業を行い、理論と実践から研究授業を作り上げていった。

平成17年度は、マット遊び、マット運動を中心に各学年・仲よし学級、計7回の研究授業を行った。

平成18年度は、ボール遊び、ボール運動を中心に各学年・仲よし学級、計7回の研究授業を

行った。

平成19年度は、1学期に各分科会の事前授業を行い、それを受けて再検討をし、研究発表会を迎えた。

【研究の成果と課題】

「互いにかかわり合う視点」自ら楽しむ視点」において、効果があると思われた「指導・支援の工夫」は次の通りである。

① 「チーム活動」

・ 運動特性を教師側がしっかりと意識して、活動させる。
・ チームで活動しているということを意識させる。
・ チーム内での役割を明確にし、意識して活動させる。
・ チームとしての目的を明確にし、意識して活動させる。

② 「グループピングの方法」

・ 一人一人の十分な活動を保障できる人数の把握。
・ 同質集団と異質集団の特性が生かされる活動の把握。

③ 「技能」と「できる」

・ アニメーション動画や録画追いかけて再生機器などのIT機器の活用。
・ 投球時の足跡シートや段ボールハードル、紅白玉、スポンジ、タグベルトなど技を意識させたり、目的を明確にさせたりするための補助具の活用。
・ 児童の発達段階に合った学習

カードの活用。

・ いつでも見ることが出来る教室掲示物の活用。
・ 互いの活動を認め合うことのできる振り返り時間の活用。
・ 動きや技能を絞ることなく、様々（多様）な動きや技能を体験させる必要性。
・ もっとやりたいと感じさせるルールや一人一人の活動を保障できる場、一人一人に合った用具の工夫。
・ 教師や児童による技能の再現や技能の擬音・擬態化等。

小柳小学校では、これらの研究過程・方法及び成果と課題を今後の体育学習で生かし、さらにその他の教育活動へと広げていきたいと考えている。



府中市教育委員会研究協力校研究発表報告

Ⅱ ICTを活用した授業改善推進モデル校Ⅱ

感じ・考え・創造する子の育成

～ 学ぶ楽しさの実感と自ら学ぶ意欲の向上 ～

府中市立府中第一小学校

研究主任 上原 敦子

一はじめに

○本校では、平成17年度より三年間、ICTを活用した授業改善推進モデル校を受け、校内研究を進めてきた。

の成果をまとめた研究発表会をもつことができた。

二 ICT活用のねらい

○ICTの日常化
「いつでも だれでも
いつでも どこでも」

○研究主題『感じ・考え・創造する子の育成』をもとに、児童の実態に合わせて、サブテーマを「学ぶ楽しさの実感と自ら学ぶ意欲の向上」とし、自ら学ぶ力を育てていきたいと考えた。

○ICTを活用した授業改善を進めるに当たり、一年目は組織環境作りと授業実践を、二年目はICT活用の日常化をねらった実践を、そして今年度はさらに、効果的なICT活用を授業実践によって確かなものとしてまとめていった。

○1月25日には、三年間の研究



ことができた。小さな目盛りにも注意して正確に測ることができるようになった。

○技能習得のモデル化

◇四年 算数「角」

分度器の使い方、目盛りの読み方を正しく覚える上で、教師の説明とともに、児童一人一人の作業の確認にICTを使うことができた。

◇六年 算数「いろいろな立体」

立体的の見取り図を描く学習で児童が描いた見取り図を拡大して見合ったり、見取り図の描き方のコンテツツをお手本として映しておいたりすることで、一人一人に応じて個別指導をすることができ、技能習得につながった。

○発表のための情報収集

◇五年 総合的な学習の時間「地域安全マップを作ろう」

自分の課題に応じて、必要な情報を自分たちで集めたり、発表のためにまとめたりすることがICTを工夫して活用することで容易にできるようになった。

○知識理解を補う

◇三年 理科「日なたとひかげ」

子どもたちの実験の結果を確認し合い話し合いを深める時と、コンテツツによってより確かな知識として補い、科

学的な見方・考え方を深めるために、ICTを活用した。

四 研究の成果

○使う場面、使わない場面も含めて、ICTの効果的な活用方法が明らかになってきた。

○教員の意識が高まり、「よりよい授業」という視点から多くの学習場面で活用が図られた。

○拡大提示することで児童の集中力を高め、楽しく意欲的に取り組む姿が見られた。

○「授業改善」「情報教育」「環境・HP」「校務支援・研修」の四つの部会でそれぞれに活動し、指導内容の見直し、環境作り、校務の効率化等、教育活動を充実させるための土台を固めることができた。



わが校の特色ある教育 NO. 20

本宿小 「輝きのある子」の育成

府中市立本宿小学校
副校長 大和 愉子



手に向けて分かりやすく伝える学習が行われている。例えば、地域安全マップを作った6年生は、1年生に地域の様子を説明する。どんぐり拾いにでかける2年生は、楽しそうな遊びを見せて、1年生を誘って一緒に遊ぶ。障害について学んだ4年生は、3年生にバリアフリーについて伝える。このように授業の中で、相手に分かりやすいように伝える力や分かるようとして聞く態度が養われている。

●たてわり活動で

るウィーン市ヘルナルス区ハルシユガッセ小学校の訪問団が来校して、本校と友好親善校の提携をした。歓迎の集会では、本校の子どもたちの全員合唱と、合唱団の歌声を聴いて頂き、音楽を通じた交流ができた。12月には、子どもたちの作った年賀状作品を電子メールでウィーンへ送り、ウィーンからもメッセージが届いた。遠い国との交流では、これからのいろいと工夫をしていきたい。

2 自ら学ぶ実践力の ある「輝き」

●農園活動

夏休み期間中の12日間に、教室をサマースクールの会場としている。子どもたちは、自由で自分の学びたいものを持って来て、自分の決めた課題に取り組んでいる。

以上のように、今年度も、全教職員がそれぞれの工夫を重ねながら、教育活動を行った。日々の取組を通して、本宿小の「輝きのある子」を育てている。

1 人間性豊かな「輝き」

国際社会を生きる現代の子どもたちには、コミュニケーション能力が求められている。本校ではこの課題解決に次のように向かい合っている。

●人との関わりを深める

平成16・17年度には府中市教育委員会の研究協力校として、国語科で話し言葉の「聞く力・伝える力・深める力」を高める指導を行ってきた。その成果と課題を受けて、学んだことを相

●海をこえて

昨年秋、以前から交流のあ

1年生から6年生までの全児童がたてわり班をつくる。このグループでは、遊ぶだけでなく、校外でのオリエンテーリング、交流弁当、校庭の落ち葉はきに取り組む。「本宿ふれあいの日」には、保護者も参加して交流を深める。一緒に遊んだり、協力したり、働いたりすることで、子どもたちは、人と関わる楽しさ、思いやりや協力することを体験している。

校地の中にある農園では、野菜作りを行っている。土作り、種まき、苗の植え付けから収穫まで、地域の方の協力を得て進めている。授業のゲストティーチャーに来ていただくと、分からないことを質問する子どもも多い。

収穫までの世話をカードにまとめることで、植物の生長に気付いたり、昆虫の様子を観察したりしている。また、野菜を家で調理したことでそのおいしさに気付く子どももいる。栽培する体



本校は、昭和45年に市内で14番目の小学校として誕生した。地域の中には、開校当時の思い出をありありと語ってくださる方がいる。地域の中で温かく支えられていることを感じる。本校では、学校教育の中で目指す子どもの姿として、「輝きのある子」をキーワードにしている。既に、平成2年の創立20周年記念誌に「輝きのある子」の言葉があり、時代に応じた工夫を重ねて、子どもたちをはじめくんできたことがわかる。今年度の「輝きのある子」の実現に向けた取組をいくつか紹介する。

3月研修会・委員会等予定	日	曜	研修会・委員会等	会場	研修内容等
	3	月	生活指導主任会	教育センター	全体会(連絡・検討事項)小・中分科会
	3	月	特別支援学級代表者会	教育センター	代表者会・分科会
	4	火	学校評価委員会	教育センター	全体会
	6	木	教務主任会	教育センター	全体会(連絡・検討事項)小・中分科会
	7	金	進路指導主任会	教育センター	全体会(連絡・検討事項)
	18	火	府中市立幼稚園修了式	各幼稚園	修了証書授与(修了生 159名)
	19	水	府中市立中学校卒業式	各中学校	卒業証書授与(卒業生 1788名)
	21	金	地域安全協議会全体会	教育センター	全体会
	25	火	府中市立小学校卒業式	各小学校	卒業証書授与(卒業生 2025名)



今年7月に行われる洞爺湖サミットにおいても地球温暖化などの環境問題が主要テーマとなる。

環境教育については、平成15年7月の「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」の制定および平成16年9月の「環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する基本的な方針」が閣議決定され、普及啓発が進められてきた。

環境省が毎年発行する「環境白書」は、昭和47年から従来の「公害白書」から名称が改められた。また、平成13年より「循環型社会白書」も刊行され、平成19年には「環境・循環型社会白書」として合冊となり発行されている。これら白書の内容からも、環境問題については、国内外の社会の動向により、その認識や優先課題が少しずつ変化してきた。

エネルギー・環境問題は、人類の将来の生存と繁栄にとって重要な課題である。21世紀に生

「21世紀を生きる子どもと環境教育」

生きる子どもたちには、環境や自然と人間のかかわりについての理解を深め、よりよい環境の創造のために主体的に行動する実践的な態度が求められている。また、自然に対する豊かな感受性や生命を尊重する精神を培うことも大切である。

平成19年の「環境・循環型社会白書」には、総説「進行する地球温暖化と対策技術」我が

国が国の循環型社会づくりを支える技術」が掲載されている。エネルギー・環境問題は、科学技術と深くかわりがあり、その解決には、科学技術に寄せる期待も大きい。科学的なものの方方や考え方を学ぶことはますます重要である。

平成18年12月に改正された教育基本法において、教育の目標に「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」と環境教育の必要性が表現され、平成19年6月に改正された学校教育法でも、義務教育における「生命及び自然を尊重する精神」「環境の保全に寄与する態度」の育成について、明確に表現されている。環境教育について、内容の改善・充実を引き続き進めていく必要がある。

(指導主事 長田 和義)

事務局の窓

川崎平右衛門の資料を訪ねて

府中市郷土の森博物館

学芸係主査 馬場治子

先日岐阜へ行ってきた。美濃国は、府中押立出身の江戸幕府の代官川崎平右衛門定孝の赴任先の一つである。来年度、郷土の森博物館で平右衛門に関する特別展を計画しているのでその資料調査である。

この地方はつい何十年前か前まで、木曾川・長良川・揖斐川のほか自然・人工取り混ぜて無数の水路が走る洪水地帯だった。

平右衛門も治水工事に苦心したが、今でも彼が造ったという水門が残っている。

そこで一枚の絵図を見た。その水門から10km余り、ドーンと新水路を通す計画図だというのである。これは明治時代になって、やっと取り入れられた工事方法に通じる斬新な考え方を表している図だそうである。

この絵図には、時代も注記も書かれていないので、実のところは、いつ誰がこんな事を考えたのか分からない。しかし、地元の研究者は、これが考えられるのは、平右衛門しかいないと確信している。250年以上経っても信じてもらえる仕事ぶり、ちょっとすごいと感じた次第である。

あとがき

「一月は往ぬる、二月は逃げる、三月は去る」と言われるが、まさに言葉通り今年度も最後の月を迎えた◆今年度の教育界は、大変革の年であったといえる。

平成18年12月に60年振りに教育基本法が改正され、それを受けて学校教育法の一部改正等法律の改正も数多くあった。副校長・主幹教諭の設置等。特別支援教育元年と言われるように本格実施◆教育再生会議の報告では、学力向上のため教科時数の増加の提言、教員の資の向上では教員免許更新制の導入が具体化した◆中央教育審議会の答申では、

生きる力の育成を踏まえ、学力の捉え方の明確化を始め今日的・長期的な課題への対応を示した◆大きな変革に心の引き締まる思いであるが、そんな中5月号で「東京都平和祈念碑の花壇デザインで表彰」を紹介した府中第六中の小関美咲子さんのお母様から先日花壇の写真とお礼の手紙をいただき心が和んだ。



(横山 洋)